

ことばの響き

神戸女子大 羽溪 了先生
わが家のこども達が、何やら妙な実験を
やっていました。

同時に炊いたご飯を同じ形の二つのビンに容器に同量入れ蓋をします。そして一方には「有り難う」と優しい声で言葉を、またもう一方には「馬鹿野郎」と罵りの言葉をかけます。これを毎日、何回となく続けますと「馬鹿野郎」と罵っていたビンのご飯は一週間もたたないうちに底の方から里く黴（か）びて来ましたが、「有り難う」と優しく声をかけた瓶のご飯は、全く黴びる気配も見せません。その実験を始めて三週間以上もたつと、片方は見るも無残な黴びだらけですが、もう片方は奇麗なままです。その現象に驚きながら、黒く汚く黴びたご飯の瓶を見ていると心が苦しくなります。まったく同じ時期に同じところで生まれたお米でありながら、同じ条件で炊かれれた言葉によつては、こんなに違いが現れてしまうのです。

実は、日本語ではなく他の国の同じ意味のことばで行つても、同じような結果にならうです。

言葉には、意味以外に「響き」という大切な要素があることに気づかされました。すばらしい現象に出会えた感動と、その反対に恐ろしさを感じずにはおれません。「なじられ続けて汚く黴びるのは、ご飯だけではない。自分は多くの生命に対し、とんでもないことをし続けてきたのではないか?」。日常の会話でも、意味を超えた美しいことばの響きを大切にしたいものであります。言葉のもつ響きは人類に留まらず、自然界共通のものなのでしょう。

内容を、その人その人の症状に合わせて沢山のほとけさまをご紹介くださいました。その中で、アミダブツというほとけさまだけは唯一「声のほとけさま」であります。アミダ仏自身が仏様になられる前の法藏菩薩の時に「自分は名前のほとけになる」と誓われています。その名（名号）は言葉であり音であり響きであります。

私は、子供達から「お父さん」と呼ばれて、います。自分にかけられている言葉が、なる呼び名を超えて、ソフト自身の父親の、懐かしい優しさや厳しさの響きとなつて、ワーッと沸き上がり、こころ温まる思いに駆られることがあります。ことばの響きは心を温め優しくしてくれます。

アミダ仏がなぜ言葉のそして響きのほとけさまにならねばならなかつたのかを昧今わせていただきます。「まかせよ。かならず救う」という大安心の響きのなかでこそ、障り多い私の生命が、間違いなく、その障りと共に、力強くあるいは力まずに淡々と歩ませて戴けるのでしょう。

如来様は、恐れおののきながら生きている私
のために、六度の行を含むあらゆる行を完成
し、結果、成就した智慧と慈悲とのお念仏で
「帰命無量寿如来・南無不可思議光」（いつ
でも、どこでも、だれでも、照らしているよ
呼んでいるよのほとけをよりど「ろにせよ」）
と働いていくくださいのです。

私たちはお念仏のおしえでは、「大無量寿經 (讃仏偈)」のなかに
布施調意 布施の行
戒忍精進 持戒・忍辱・精進
如是三昧 あるいは禪定
智慧為上 この六度の行は智慧と慈悲。 わたしのが仏になるに当たつて
吾善得仏 薔うこれらの願行満足し
普行此願 生きとし生けるものそのための
一切恐懼 大いなる懲めとなろう
為作大安

項目的には

- ① 布施（ほどこし）
- ② 持戒（いましめ）
- ③ 忍辱（たえしのぶ）
- ④ 精進（たゆまぬ努力）
- ⑤ 禪定（こころを鎮める）
- ⑥ 智慧（真実を見抜く）

これを「六度」といい、慈悲（布施・利他）と智慧（利他）を中心とした「大乗菩薩道」の基本精神です。

「お彼岸」。バラミタ。詳しくは「到彼岸」。
（かの岸に到る）。

その「彼の岸」とはなんでしょう。ニルバーナ（涅槃・さとりの世界）です。

もともとニルバーナとは「炎を吹き消す」という意味のことばで、むきぱり・怒り・怨み・ねたみ・腹立ちなどの煩惱の炎の火。根源的には「無明（真実が見えない・無知）と「渴愛（自己へのあくなき執着）」を退治して、「智慧」と「慈悲」の世界に到るさ

九月のこよみ

八日	六日	五日	四日	二日	一日
日高町役場	出石町福祉まつり実行委員会	ボランティア組織代表者会議 教区連研研究会（別院）	浜家法事	廃品回収	ボランティア協議会 体育部会

十二日	田中 重雄氏宅法事
十三日	一万人大会財務部会（別院）
十五日	坂本さかえ氏宅法事
十六日→十八日	千鳥ガ淵戦没者墓苑参拝
二十日	敬老の日 彼岸の入り
二十一日	日高町役場
二十三日	朗読ボランティアあすなろ編集日 彼岸△云 △口同役日

二十六日 二十四日 二十五日 西方寺彼岸会法座
長寿の郷研修会 宮嶋千秋氏宅法事 真覚寺蓮運如上人遠忌

みのりを聞く会
二十七日
おなそ（録音）

九日 萬井隆雄氏宅忌酒事

○法要法語終了後、例年どおり午後2時 法要・法

八月十四日 栗尾
兼井 まちさ

葬儀



お盆



一年に一度ご祖先様をお迎えしてお供養申し上げましようとお勤めする行事がお盆です。日本ではすでに7世紀の半ばころから朝廷でも民間でも行われていたといいますから、仏教渡来と殆ど同時に行われてきた行事のようです。

迎え火、送り火を焚き、お墓にお参りして亡き人をお供養することは日本古来の美德ですし、日本文化の華と云うべきでしょ。

ところが世の中には、とんでもない誤解から美しい花の咲くことがあります。そのよい例がこのお盆だと思います。

盆という字は、古いインドの言葉で「ウランバナ」と云います。ウランバナが孟蘭盆と中国語に移され、それが日本で「ぼん」とつしまって渡つて来たのです。

もとの「ウランバナ」ことばの意味は、「逆さに吊り下がつている」という意味です。その言葉の意味を死後、地獄や餓鬼道に落ちたなら、さぞかし逆さ吊りの苦しみに逢つてゐるに違ひない。迎え火たいてご祖先さまお迎えしてお供養申し上げようと、そのように解釈して始まつた行事です。

が、これはいはば「誤解から生まれた美しい花」です。

お祭迎さまは、夏安居（げあんじ）と云つて、毎年、弟子たちと一緒に夏の長期研修会をなさいました。長い雨季のあいだ森にこもつて、それぞれに瞑想したり修行したり学問を励むのです。

省」する日と定められました。その長く厳しい研修会の最終日。戒律には八月十五日と定められていますが、その最終日を自恣（じし）といつて「懺悔・反悔」のぼれ高慢の種になつてはいなか。いやもつと、わたしたち日常生活、ひつくりがえつた生き方をしてはいなか。またまた、さかさむきのひとりよがりな考え方になつ

てはいなか。時々刻々、反省、懺悔。 「ものごと逆さに見たり考えたりしていなんではないか」その「自恣」の戒めが「ウランバナ」だったのです。

「目蓮よ、お前一人の力で生きていると思うなよ。お前のために身を餓鬼道に落としてまで苦労なさった親の御恩を思い見るがよい」との寓話も後から付け加えられたのでしょう。ひっくりがえつたものの見方をしていか。ひっくりがえつた考え方になつていか。

それはほかならぬ、私の問題です。お盆は、人事ではなく私の人生の課題と向き合ふ日だったのです。

不惑（へふわく）の歲

突然お招きいただき、しかも、予想もしなかつた奥様40歳のお誕生日の祝辞をとります。

しかし、まずもつて40歳お誕生日おめでとうございます。

お盆のお歳になられた」といってお祝いをしました。「不惑」とは「惑（まど）わず」と書きまして、40になつたらもう人生の方向に見定まりができる、あつちに行こうかこっちにしようかと惑つたり迷つたりするこのない「どつしり腰の据わつた歳」になつたんだと云うことです。

このことは、あの孔子様が『論語』でおしゃつております。

わたしはこの道を歩んで行く、この方向に生きて行くとこう見定まりがついで腰の据わらないでは40歳になつた値打ちはないんだよと云うことでもあるのでしよう。

しかし私は思うのです。孔子さまの時代ならそうかも知れないが、現代、現実には、

むしろ反対ではないのだろうかと思います。門徒式章も着けて。やはり「お参りする」と云います。普通常識では「参加する」「出席する」というべきではないのでしょうか。



八月十九日
勝林寺こども研修会
おはなしに聞き入るこどもたち

40になれば、その私に気づきなさい。
そしてその煩惱だらけのこのわたしに「ご信心のすくい」を示してください。お正信偈と云うことです。

「感染の凡夫、信心発すれば」「煩惱即涅槃」。

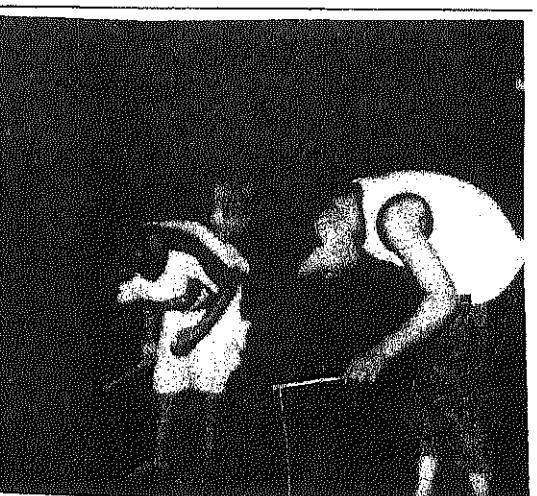
悩み多い人生、煩惱の染み付いた日々、それがそのまま、如來清淨の願心に、願われ呼ばれているのだと知らしてください。のです。それがお念佛の教えです。

これをもつて四十歳お誕生日のお祝いの言葉と致します。お祝いの言葉となつていただしようか。失礼致します。

み矛盾が深刻に迫つてくるのではないかと思ひます。女性・妻としての悩み、親としての心配、家庭の問題、仕事のくるしみ…。云つて見れば、生きて行くそのことが苦しむではないのか、人生そのものが煩惱苦惱と実感させられるのが四十歳という節目であるように思ひます。

そうした実感からの言葉がお正信偈で出ています。「感染の凡夫」という言葉で

参加と参詣



勝林寺こども研修会
ゲームに熱中するこどもたち

「勝林寺寺報」八月号にたいして、匿名で、次のような質問が寄せられました。（質問）「仏婦総会にお参りして」とか、記事のなかにも「一人一人小躍りしながらと云つてついいほど喜び勇んでお参り出す」などとあります。婦人会の総会に「お参りする」とはおかしいと思いまして、普通常識では「参加する」「出席する」というべきではないのでしょうか。

（回答）お答えするに当たつて、まずこの文章を書いてくださつた方に質問はがきを見せて尋ねて見ました。

なるほど、世間一般の総会とか研修会に行くときは、私も「参加する」とか「出席する」とか云います。たしかにそれが一般常識です。しかし、お寺である会にはやはりいつでも「お参り」する気持ちで、仏婦の仲間はみなそのように云つて来ました。

「おつとめ」の本とお念珠とを持って来ます。門徒式章も着けて。やはり「お参りする」と気持ちで参ります。お寺に来るといつでもご法話がありますし、ほとけさまの礼拝もあるからです。